



第二次ドルショック

専務取締役 相 良 毅

激動の年が暮れて、不透明の年が明ける。

日本の経済は、昭和46年夏のドルショックと、続く48年暮のオイルショック以降、為替と原油に揺さ振られ続けて来た。

1 ドル360円の固定相場が崩壊して15年を経過した現在、ドルの下落は止まる所を知らない。

原油価格も1 バレル2.2ドルから30ドル台まで上り、再び下落して落付く先は予想もつかない状態である。不透明の年と云う外はない。

日本の産業構造は根本的改革を迫られ、多くの企業はその経営基盤を脅かされている。

この様な状況の中に於ても尚生長を続けているのが、電子、バイオ、新素材である。前途に不安を覚える企業群が、この成長産業を見送る筈はなく、一斉に之等の分野に殺到し、忽ち過当競争の状態に入りつつある。

競争は生産、販売だけではない。この分野に於ては、研究開発の競争は更に激烈である。何れも未成熟産業であるため、その進歩、変化の速さは想像を超えるものがあり、正に“秒進分歩”の世界である。頭脳の斗いに加えて、時間との斗いが避けられない。

研究とは本来アカデミックなものであり、拙速は邪道であるかも知れない。併し、現在、企業の研究開発に従事する者は、好むと好まざるとに拘らず、この激しい競争に捲き込まれてしまっている。不幸な時代と言うべきかも知れない。併し、嘆いている暇はない。周囲が皆走っている。立止まれば直ちに追越され、取残される。

こんな状態が当分続きそうだ。世界の経済が安定して、皆が落ち着いた気持で研究に専念出来る日はもう来ないのであろうか。